

親の養育態度に影響を及ぼす要因の検討

田 淵 創

問題親の養育態度に影響を及ぼす要因として、従来、地域、社会階層、家族、生活条件などが取り上げられてきた。

例えば、児玉省らは(6)1950年頃から日本各地にわたる地域において、親から見たしつけと子どもから見たしつけの類型とその出現頻度、しつけの地域の特徴、男女差、年齢差などの検討をした。このしつけの類型は、厳格型、過保護型、矛盾不一致型、拒否型、放任型、民主型、混合型に分けられ、日本の母親によく見られるのは過保護過保護+厳格、厳格、放任、民主型であり、地域によってこの出現率が異なることを見い出している。

社会階層によるしつけ方の相違について検討したものに本村の研究がある。(9)彼は大阪市内の3才児324名の幼児と母親を対象とし、教育、収入、学歴、地域の総合指標にもとづくホーリングシェッド(Hollingshed)の方法を参考にして3つの社会階層に分類し、その母親のしつけ方(説得の方法)を調査した。それによると、上層においては「知性型」の説得方法の傾向が、中層においては、「情緒型」のそれが強く、そして下層においては、「強制型」のそれが強いといえるとしている。

家族を扱った研究は多い。中西らは(11)、ラドケ(Radke, M. J.)の調査項目に準拠した養育態度の調査項目を吟味設定し、面接質問により、親の子どもに対する態度、親の態度と親自身が幼時に受けたその親の態度との関係、親の態度と子どもの行動特性との関係について研究している。その結果、親の態度は、父母、世代、家庭の経済状況、親の教育程度によって異なる。父は母よりも子どもに恐れられ、母は父よりも子どもに対して神経質である。両親は自己を祖父母より民主的であると考えており、高い経済層の親ならびに教育

程度の高い親は低いものより民主的であると指摘している。

生活条件では、母親の労働観と養育態度の関係を見た波多野、秋山らの研究がある。(3)彼らは、母親が職業をもっていること、および職業についてどのような考え方をもっているかが、子どもの養育についての考え方、および養育の仕方とどのようにかかわっているかなどを検討し、職業をもっている母親は、職業をもっていない母親よりも、子どもと交わることに努力している傾向がみられることなどを見い出している。

このほか、文化型によるしつけの差異を追跡したM. ミード(Mead, M.)の研究(7)、両親の受けた教育年数としつけの型との関連を調査したボールドウィン(Baldwin, A.L.)らの研究(1)、生活構造の1つとして居住形態を取り上げ、それが母親のしつけ態度にどのような影響をおよぼすかを見ようとした森脇らの研究(8)、養育行動に関し母親が用いた情報源を主として質問紙で調べ、養育態度に大きな影響をおよぼすとみられる文化的背景の検討を試みた波多野、高橋らの研究(2)等々、この分野における研究は実に多くみられる。

しかしながら、親の養育態度は純粋に心理的な性質のものであるために、この親の態度をどのように類型化していくかという問題が起こってくる。各研究者がさまざまな方法でこれを測定して類型化している現在、一義的な関係が見い出されているとはいいいくい状態である。

また、上記のように数多くの要因が検討されているが、一つの要因を取り上げる時、他の要因がどれぐらい厳密に統制されているかという問題も充分に考慮されなければならない。

このような問題点を明らかにしながら研究が進められれば、さらに実りの多い結果が得られるで

あろう。

本研究は、これらの問題点の克服にはまだまだ不十分なものではあるが、将来へのワンステップとして、親の養育態度に影響をおよぼす要因を細かく検討することを目的としたものである。

第一調査（1969年10月）

方法 親の養育態度の測定には、田中教育研究所（品川不二郎、品川孝子、森上史郎著）が作成した。「田研、両親態度診断検査」^(注)を使用した。

被調査者は芦屋市内の幼稚園児39名と保育園児41名、計80名の両親。

結果とその考察

まず父親と母親とを比較してみる。（表1）

表1 父親と母親の比較

態度類型(その特徴)	父親の 得点	母親の 得点	差	検定
(1) 消極拒否 (子供に関心が がうすい、放っておく)	31.86	29.68	2.18	※※
(2) 積極拒否 (どなったり たたいたり荒っぽい)	30.39	27.26	3.13	※※
(3) 厳格 (命令や禁止の多い 態度)	27.84	27.04	0.80	
(4) 期待 (高い期待や要求 をかける)	30.48	30.34	0.14	
(5) 干渉 (子供の世話をや きすぎる)	31.63	29.99	1.64	※
(6) 不安 (不必要な心配を する)	26.08	25.20	0.88	
(7) 溺愛 (ねこかわいがり 的態度)	27.53	27.41	0.12	
(8) 盲従 (子供に服従する 態度)	26.41	26.86	-0.45	
(9) 矛盾 (気まぐれな態度)	29.55	28.25	1.30	(※)
(10) 不一致 (父親と母親の 態度の不一致)	28.70	29.71	-1.01	

(注) 得点はすべて40点満点、最低は10点、検定はt検定で、※※は1%、※は5%水準の有意差が認められたもの、(※)は“nearly 5%”で傾向がうかがえたものである。以下同様である。

このように、(1)消極拒否、(2)積極拒否、(5)干渉の項目において、母親がかなり低い得点をしめし、有意の差がみられ、(9)矛盾の項目もその傾向がうかがえた。特に母親は子どもに対して拒否的態度をとりやすいことがはっきりとしている。全般にわたって父親の方が母親よりも良好な態度をしめしているが、(8)盲従(10)両親の不一致においては母親より悪い。仕事にきびしい男も、家庭にもどれば子どもに目のない甘い父親となってしまうのであろうか。また父親よりも態度得点の低い母親に対して不満をもつ父親が多いことも無理からぬところであろうか。特にガミガミとうるさい母親の拒否的態度にうんざりしている甘い父親が多くいると考えられる。

次に幼稚園と保育園の比較を試みた。(表2)

父親の場合、双方とも仕事をもっているので大差はなく、有意差のあるものは一つもなかった。ところが主婦業に専念する幼稚園の母親と主婦業と仕事を両立させねばならない保育園の母親にははっきりと差が出ているのである。すなわちすべての項目にわたって保育園の母親は幼稚園の母親よりも悪くなっている。特に保育園の場合、母親も仕事をもっているためか子どもへの関心が集中しにくく、(1)消極拒否の傾向がはっきりでている。また夫婦の話し合う時間も限られてくるのか、(10)不一致の項目にも有意差がみられる。またこれらの反動として(5)干渉(7)溺愛(8)盲従にもかなりの差がみられる。このように母親にとって職業の有無がかなり養育態度に影響をおよぼしているといえる。

次に子どもの性別によって、親の養育態度が変わるものかどうかの検討を試みた。(表3)

このように有意差が認められたものは、母親が男の子に対してよりも、女の子に対して厳格であるという1点のみで、はっきりとした差はみられ

(注) この調査用紙は田中教育研究所がサイモンズ (Symonds, P.M.) の親子関係のモデルを参考にして、これを親に対する質問紙への解答の形で評定するものである。サイモンズの3つの軸(拒否—保護、支配—服従、一貫性—矛盾)から、つぎの10の親の態度に分析するように構成されている。(1)拒否(消極拒否、積極拒否)(2)保護(干渉、不安)(3)支配(厳格、期待)(4)服従(溺愛、盲従)(5)矛盾(矛盾、両親の不一致)。この10の型に各10問の質問が割り当てられている。そしてこれらの解答は 一)ほとんどあてはまる ロ)少しあてはまる ハ)あまりあてはまらない ニ)ほとんどあてはまらない の4段階に分られ、各々に 一)1点 ロ)2点 ハ)3点 ニ)4点 が与えられる。さらにその結果は診断グラフによって表わされ両親の態度が測定されることになる。この得点はパーセントイル得点に換算され、20パーセントイル未満を危険地帯、20パーセントイル以上50パーセントイル未満を中間地帯、50パーセントイル以上を安全地帯として分類している。このテストは信頼性、妥当性などかなり高いものであると報告されている(4)。

表2 幼稚園と保育園の比較

態度類型	父 親				母 親			
	幼稚園	保育園	差	検 定	幼稚園	保育園	差	検 定
(1) 消 極 拒 否	31.85	31.88	-0.03		30.72	28.68	2.04	※
(2) 積 極 拒 否	31.08	29.73	1.35		27.69	26.85	0.84	
(3) 厳 格 待 待	28.18	27.51	0.67		27.62	26.46	1.16	
(4) 期 待 涉 涉	30.36	30.59	-0.23		31.05	29.66	1.39	
(5) 干 渉 安 安	32.38	30.90	1.48		31.08	28.95	2.13	(※)
(6) 不 安 愛 愛	26.05	26.10	-0.05		25.56	24.85	0.71	
(7) 溺 愛 従 従	28.10	26.98	1.12		28.80	26.85	1.15	
(8) 盲 従 盾 盾	26.41	26.41	0		27.62	26.15	1.37	
(9) 矛 盾 致 致	29.77	29.34	0.38		28.92	27.61	1.31	
(10) 不 一 致	28.82	28.59	0.23		30.79	28.68	2.11	※

表3 子供の性別による比較

態度類型	父 親				母 親			
	男児に對する	女児に對する	差	検 定	男児に對する	女児に對する	差	検 定
(1) 消 極 拒 否	31.53	32.38	-0.85		29.69	29.65	0.04	
(2) 積 極 拒 否	29.96	31.06	-1.10		27.82	26.39	1.43	
(3) 厳 格 待 待	27.59	28.23	-0.64		27.86	25.71	2.15	※
(4) 期 待 涉 涉	30.35	30.68	-0.33		30.71	29.74	0.97	
(5) 干 渉 安 安	31.10	32.45	-1.35		30.20	29.65	0.55	
(6) 不 安 愛 愛	26.18	25.90	0.28		25.67	24.45	1.22	
(7) 溺 愛 従 従	27.41	27.71	-0.30		28.06	26.39	1.67	
(8) 盲 従 盾 盾	26.69	25.97	0.72		27.45	25.94	1.51	
(9) 矛 盾 致 致	29.73	29.26	0.46		28.94	27.16	1.78	
(10) 不 一 致	28.22	29.45	-1.23		29.94	29.35	0.59	

(注) 男児 49名, 女児 31名

表4-1 学歴による比較(父親)

態度類型	上位群	中位群	下位群	上位群—中位群		上位群—下位群		中位群—下位群	
				検定	検定	検定	検定		
(1) 消 極 拒 否	31.67	32.18	32.00	-0.51		-0.33		0.18	
(2) 積 極 拒 否	30.61	30.73	28.92	-0.12		1.69		1.81	
(3) 厳 格 待 待	28.24	27.59	26.75	0.65		1.49		0.84	
(4) 期 待 涉 涉	31.43	28.45	30.50	2.98	※	0.93		-2.05	
(5) 干 渉 安 安	32.72	29.55	31.25	3.17	※	1.47	※※	-1.70	
(6) 不 安 愛 愛	26.37	25.50	26.00	0.87		0.37		-0.50	
(7) 溺 愛 従 従	28.20	26.45	26.92	1.75		1.28		-0.47	
(8) 盲 従 盾 盾	26.93	25.68	25.75	1.25		1.18		-0.07	
(9) 矛 盾 致 致	30.61	29.27	25.83	1.34		4.78		3.44	※
(10) 不 一 致	29.33	28.32	27.00	1.01		2.33	(※)	1.32	

(注) 上位群—大学卒 46名
 中位群—高校卒・旧制中学卒 22名
 下位群—新制中学卒・小学校卒 12名

表4-2 学歴による比較(母親)

態度項目	上位群	中位群	下位群	上位群— 中位群	検定	上位群— 下位群	検定	中位群— 下位群	検定
(1) 消極拒否	29.80	30.18	28.35	-0.38		1.45		1.83	
(2) 積極拒否	27.40	27.29	27.00	0.11		0.40		0.29	
(3) 厳格	27.80	26.68	26.71	1.12		1.09		-0.03	
(4) 期待	30.80	30.26	29.82	0.54		0.98		0.44	
(5) 干渉	30.28	30.32	28.82	-0.04		1.46		1.50	
(6) 不安	25.64	24.26	26.65	1.38		-1.01		-2.39	(※)
(7) 溺愛	28.32	27.47	26.00	0.85		2.32		1.47	
(8) 盲従	27.16	26.87	26.41	0.29		0.75		0.46	
(9) 矛盾	29.04	28.11	27.41	0.93		1.63		0.70	
(10) 不一致	30.36	29.82	28.53	0.54		1.83		1.29	

(注) 上位群 25名, 中位群 38名, 下位群 17名

表4-3 学歴による比較(夫の学歴による母親の比較)

態度類型	上位群	中位群	下位群	上位群— 中位群	検定	上位群— 下位群	検定	中位群— 下位群	検定
(1) 消極拒否	30.24	31.68	27.75	-1.44		2.49		3.93	※
(2) 積極拒否	27.09	27.95	26.58	-0.86		0.51		1.37	
(3) 厳格	27.50	27.27	24.75	0.23		2.75		2.52	
(4) 期待	32.13	29.50	29.00	2.63	※	3.13	※	0.50	
(5) 干渉	30.96	30.41	28.58	0.55		2.38		1.83	
(6) 不安	25.83	25.59	23.50	0.24		2.09		2.33	
(7) 溺愛	28.15	28.00	23.42	0.15		4.73	※※	4.58	※※
(8) 盲従	27.61	28.32	23.25	-0.71		3.36	※※	4.07	※※
(9) 矛盾	30.24	29.41	26.08	0.83		4.16	※	3.33	※
(10) 不一致	30.43	29.91	26.50	0.52		3.93	※	3.41	※

なかった。ただ全般的な傾向としていえることは父親は男の子に対しては厳格な態度や干渉的な態度をとりやすいが、女の子に対しては服従的になりやすい。母親は、すべての項目において、女の子に対する得点が男の子に対する得点よりも低く男の子と女の子によって、多少注意のはらわれかたに差がみられるのではないかとと思われる。

第一調査の最後に学歴の要因による影響を検討してみる。

この結果、特に目につくのは、中位群の父親は子どもに対して、非常に高い期待をもっていることである(5%で有意)。自分の達しえなかった望みを子どもにかけ、それによって社会的地位の上昇に期待をもっているように思われる。また彼らの子どもに対する干渉的態度も強い(5%で有意)。これは子どもへの期待が高いが故に、あれこれ干渉するのではないかとと思われる。もう一つは下位群の矛盾的態度が目立つ(1%で有意)²

この群の父親は他の群の父親に比べて自己の感情の統制や安定感に欠けるわけである。

次に母親の場合をみると(表4-2)中位群に(6)不安, 下位群に(7)溺愛, (9)矛盾の傾向が見られるものの、各群にあまり差がみられず、母親にとって、自分自身の学歴によってはあまり左右されていないといえる。ところが、夫の学歴によって母親を分類し、比較してみると次のようになった。(表4-3)

このようにかかりの差があらわれた。まず子どもに対する期待であるが、夫の学歴が中または下位群である場合、母親の子どもに対する期待は非常に高いものとなる(有意差5%)。やはり夫の学歴などによって、収入や生活条件がある程度規定され、それによって社会階層も決まってくる。従って母親は子どもに期待をかけ、階層の上昇を望む傾向がみられる。もう一つの特徴は、夫の学歴が低い場合の母親の態度が非常に他の群に比べ

て悪いということである。即ち、(1)消極拒否、(4)期待(9)矛盾、(10)不一致で5%の有意差(7)、溺愛、(8)盲従では1%の有意差がみられた。この群には家業に従事する母親が目立つが、その仕事の忙しさや仕事と主婦業との切り変えのむつかしさあたりにその原因がありそうであるが、はっきりと断定することはこの資料だけでは不可能である。今後、さらに生活条件の要因などと組み合わせ、詳細な検討を試みることによって、その原因を明らかにしていきたい。

第二調査 (1971年10月)

方法 今回の調査用紙は次の3つの部分から構成された。(1)フェイス・シート 職業の種類や就労時間、忙しさや疲労度、収入、趣味、年令家族構成、生活の満足度などの質問。(2)リッカート尺度母親が職業をもつことについての態度を測定するために作成された17項目からなるリッカート尺度である。この尺度を作成する際、実際に職業をもつ母親に、職業をもつべきでないという項目を羅列することに疑問をもち、A・B2人の婦人の会話という形式を用い、第三者的な立場から自分の意見を記入していけるように配慮した。(3)田研両親態度診断検査 親の養育態度の測定。

被調査者は 姫路、芦屋、大阪市内の幼稚園児113名、保育園児173名、計286名の母親。

結果とその考察 まず子どもの位置(第一子かどうか)によって母親の養育態度を比較してみると次のようになった。(表5)

表5 子供の位置による比較

態度類型	第一子に対する	第二子以下に対する	差	検定
(1) 消極拒否	29.34	29.79	-0.45	
(2) 積極拒否	26.69	27.31	-0.62	
(3) 厳格	26.94	26.68	0.26	
(4) 期待	29.12	29.00	0.12	
(5) 干渉	29.52	30.84	-1.32	※
(6) 不安	23.94	26.18	-2.24	※※
(7) 溺愛	26.75	28.05	-1.35	※
(8) 盲従	25.64	26.31	-0.67	
(9) 矛盾	26.92	28.24	-1.32	(※)
(10) 不一致	28.73	29.50	-0.77	

(注) 第一子 224名 第二子以下 62名

表5にみられるように(3)厳格、(4)期待の項目を除いていずれも第一子に対する態度得点が低く、(5)干渉、(6)不安、(7)溺愛において有意な差がみられ、(9)矛盾においてもその傾向がうかがえた。最初の子どもに対する母親のとまどいや甘やかしがはっきりと目立っている。第二子以下になれば、第一子の時の経験にもとづいて、おちついた気分と、一応の自信をもって養育しているように思われる。また出産を重ねるに従って年令も重ね、生活も安定してくる影響も考えられるであろう。よって子どもの位置によって、かなり養育態度が異なっていると考えられるので、以下の分析には第一子の母親についてのみ考察を行なった。

次に母親の年令によって比較してみる。(表6)

全体としていえることは年令が増すにつれて養

表6 母親の年令による比較

態度類型	1 20~25才	2 26~30才	3 31~35才	4 36~40才	5 41~45才	2と3の 検定	2と4の 検定	3と4の 検定
(1) 消極拒否	25.00	28.88	30.19	31.31	28.25	(※)	(※)	
(2) 積極拒否	20.00	26.50	27.36	29.23	26.50		※	
(3) 厳格	25.00	26.78	27.22	28.62	27.75			
(4) 期待	22.50	28.57	30.07	31.46	28.50	※	※	
(5) 干渉	24.00	29.35	30.16	30.85	27.70			
(6) 不安	18.50	24.09	24.33	24.00	19.75			
(7) 溺愛	22.50	26.73	27.14	27.00	26.75			
(8) 盲従	20.50	25.22	26.60	25.85	26.50	(※)		
(9) 矛盾	16.50	26.75	27.24	30.08	27.25		※	※
(10) 不一致	21.50	28.51	29.54	29.23	27.50	(※)		

(注) 20~25才 2名、26~30才 120名、31~35才 85名、36~40才 13名、41~45才 4名

育態度が好ましくなっていることである。30代前半と後半とでは(9)矛盾で後半のほうがよいとでたが、あまり差はなかった。20代後半と30代とでは、はっきりとした差がみられた。20代後半と30代前半では(4)期待に有意差があらわれ、(1)消極拒否、(8)盲従、(10)不一致にその傾向が、20代後半と30代後半では、(2)積極拒否、(4)期待、(9)矛盾に有意差が(1)消極拒否に傾向がみられた。いずれも年上の母親の方がよい結果となっている。やはり、年上の母親の方が多くの経験をつみ知識も豊富で、安定しているように思われる。

次に社会階層に重要な影響をもつ職業を要因として検討してみる。まず夫の職業と母親の養育態度とのかかわりをみる。(表7-1)

全体を通してみると管理的職業従事者にかなり

高い態度得点があらわれている。専門技術事務職業従事者および現場労働者との差が目立つので三者の間で比較してみると、専門技術事務職業従事者については(6)不安、(7)溺愛、(8)盲従できわだった差がみられ、(5)干渉の傾向もみられた。すなわち、過保護および服従の態度が目立った。現場労働者については(2)積極拒否(4)期待に有意の差が、(3)厳格にその傾向がみられた。

この結果は、石黒大儀が名古屋市内で行なった調査の結果(5)すなわち、サラリーマン階層に干渉のしすぎ、労働者階層に体罰、叱責が多いということと対応しているように思われる。

次に職業をもつ母親について、職種によって養育態度がどのように異なるかをみてみた。(表7-2)

表7-1 夫の職業による比較

態度類型	① 商工サービス 家族従事者	② 商工サービス 自営業者	③ 販売サービス	④ 自由業主	⑤ 現場労働者	⑥ 専門技術事務	⑦ 管理的職業	⑤と⑦ の検定	⑥と⑦ の検定
(1) 消極拒否	29.00	29.33	28.92	29.92	28.75	30.05	31.57		
(2) 積極拒否	27.92	27.67	26.56	26.92	25.79	27.28	27.93	※	
(3) 厳格	28.67	27.72	26.36	27.77	25.79	27.38	27.71	(※)	
(4) 期待	31.17	28.61	29.00	31.92	28.24	29.09	32.14	※※	
(5) 干渉	31.33	30.33	30.24	30.46	29.14	28.63	31.50		(※)
(6) 不安	24.33	24.53	23.96	25.54	23.88	22.98	26.71		※※※
(7) 溺愛	25.75	26.39	26.88	29.08	27.50	25.71	29.57		※※※
(8) 盲従	26.00	25.42	25.48	27.23	26.02	24.94	28.07		※
(9) 矛盾	28.00	27.08	26.20	29.00	26.62	26.88	28.29		
(10) 不一致	29.25	29.50	29.48	31.31	28.02	28.15	30.36		

(注) ①12名, ②36名, ③25名, ④13名, ⑤58名, ⑥58名, ⑦14名, この他に農林漁業家族従事者1名

表7-2 母親の職業による比較

態度類型	① 商工サービス 家族従事者	② 商工サービス 自営業主	③ 販売サービス	④ 自由業主	⑤ 現場労働者	⑥ 専門技術事務	⑦ 管理的職業	①と⑤ の検定	①と⑥ の検定
(1) 消極拒否	28.43	29.43	29.63	29.71	30.67	29.79	29.50	(※)	
(2) 積極拒否	26.65	28.29	26.39	27.14	27.33	27.47	27.50		
(3) 厳格	27.48	26.86	27.21	26.57	27.67	27.30	29.00		
(4) 期待	29.26	28.00	28.58	29.57	31.17	30.47	28.00		
(5) 干渉	30.30	26.14	29.16	30.71	30.42	30.40	21.50		
(6) 不安	24.17	24.71	24.74	22.71	24.88	23.79	23.50		
(7) 溺愛	26.78	26.14	26.79	25.29	27.63	28.05	27.50		※※
(8) 盲従	25.78	25.86	25.47	26.71	27.63	26.07	26.50	※※	
(9) 矛盾	26.00	27.57	27.63	28.43	29.46	27.65	26.50	※※	
(10) 不一致	28.87	28.36	27.05	31.71	29.17	29.60	23.50		

(注) ①23名, ②14名, ③19名, ④7名, ⑤24名, ⑥24名, ⑦2名, この他に農林漁業家族従事者1名

これらの職業のうち、商工サービス家族従業者現場労働者そして専門技術事務職の3つを比較してみる。全体的にみて、父親の職業の場合ほど差がなく、一貫していえることはない。しかし、わずかながら商工サービス家族従業者が他より低い得点を示している。特に(7)溺愛や(8)盲従の傾向がみられ、はっきりとした差が見い出される。他の職業よりも子どもとの接触時間が多いということがからんでいるかもしれない。

続いて、労働の形態(フルタイムかパートタイムか内職か)によって、またその仕事の忙しさや疲労度、また仕事の満足度によって養育態度を比較してみたが、1~2の傾向、例えば「仕事に不満群は他の二群に比べて拒否および厳格の傾向がある」を除いて、特に目立った差を認めることはできなかった。

次に生活満足度と養育態度の関係をみた。(表8)

表8 生活満足度による比較

態度類型	満足群	普通・不満群	差	検定
(1) 消極拒否	30.76	28.53	2.23	※※
(2) 積極拒否	27.34	26.55	0.79	
(3) 厳格	27.60	26.42	1.18	(※)
(4) 期待	29.95	28.86	1.09	(※)
(5) 干渉	29.93	29.50	0.43	
(6) 不安	24.45	23.71	0.74	
(7) 溺愛	26.80	26.88	-0.08	
(8) 盲従	26.03	25.42	0.61	
(9) 矛盾	27.74	26.42	1.32	※
(10) 不一致	30.12	28.17	1.95	※※

(注) 満足群 86名, 普通・不満群 138名

生活に満足している母親の方が、やはり養育態度は好ましく、子どもを拒否することなく、一貫した態度をとっており、父親とも一致した態度である。なお、少し横道にそれるが、生活の満足度と職業の有無を 2×2 の X^2 検定を行なったところ、 $P < .02$ で職業をもっている母親には生活に満足していない人が多いということが目を引いた。

この他、家族では同居者の有無、また母親にゆとりある生活を与えるであろう自由時間の有無、その余暇のすごし方などを要因として養育態度を比較検討したが、一貫した傾向はみられず、親の

養育態度に影響をおよぼす主要な要因とは断定できない。

最後に母親の労働観、すなわち母親が職業をもつことに対する態度について検討してみる。まず作成したリッカート尺度を紹介する。

A: ねえ、奥さん。私、働きに出てみようかと思うの。

B: そんなことって、あなた。花子ちゃんと太郎ちゃんの世話はどうするつもりなの。

(1. 母親はいつも子どものそばにいるべきだ)

A: 子どもは保育園に預ければいいわ。

(2. 子どもを施設に預けても母親は職業をもつべきだ)

かえって独立心もできると思うの。

(3. 子どもとの接触時間が限られ、子どもに独立心ができるので母親は職業をもつべきだ)

B: でも掃除や洗濯、炊事はどうなさるおつもり?

A: 主人に手伝ってもらおうわ。

(4. 家事・育児は夫婦が分担して、母親は職業をもつべきだ)

働きに出ると花子にピアノを買ってやれるし、家計も楽になるでしょう。

(5. 消費生活向上のため母親も職業をもつべきだ)

B: お金のことなんか、御主人にまかせておけばいいのよ。

A: 私にとっても友達が多くできて社会性も身につくし

(6. 職業をもっと、色々な人と接することにより社会性を身につけることができるので母親は職業をもつべきだ)

主人の苦勞もよくわかるんじゃないかしら

(7. 夫の仕事への理解が深まり、共に成長していくので、母親は職業をもつべきだ)

B: 働いていると気をつかうことも多いし、何といても体が疲れるわ。

(8. 精神的・肉体的に疲れるので、母親は職業をもつべきでない)

そうすれば、いらいらして子どもさんや御主人にやつあたりすることもおこるんじゃない。

(9. 母親が職業をもっと、仕事の結果に家庭の雰囲気かわされる恐れがあるので職業をもつ

べきでない)

A：でも家の中に閉じこもっているよりも、気が若くいられて生活に張りが出てくるんじゃないかしら。

(10. 気が若々しく保たれ、生活に張りがあるので、母親は職業をもつべきだ)

B：働きに出ると、本を読んだり好きな手芸もできなくなるわよ。

(11. 趣味や教養のための時間がとれなくなるので、母親は職業をもつべきでない)

A：まあ、そうだけど…。幸い教師の資格をもっているから、それを生かして少しでも社会に役立ててみたいの。

(12. 母親も社会のために少しでも役立つべきだ)

B：社会のこともいいけれど、あなた。家はどうなるの。残業なんかで生活が不規則になるわよ。

(13. 生活が不規則になるので、母親は職業をもつべきでない)

あなたがいなければ、一家が団らんする時間も少なくなってくるし…。

(14. 家族の団らんの時間が少なくなるので母親は職業をもつべきでない)

A：じゃあ、暇な時だけ働く仕事ならいいかしら。

B：でもねえ…。母親は主婦業に専念してればいいんだと思うわ。

(15. 主婦業のひとつの仕事であるから外へ働きに出る必要はない)

A：だって男女同権でしょう。女性も男性と同様仕事をもってどんどん社会へ進出すべきじゃないかしら。

(16. 母親も社会の一員として職業をもつべきだ)

B：そうはいうけれど、絶対に家庭と仕事は両立するんじゃないわよ。

(17. 家庭と職業は両立しないので、母親は職業をもつべきでない)

このような17項目について、賛成、やや賛成、どちらともいえない、やや反対、反対の5段階で評定させた。

まず全体的な傾向についてみる。(表9)

表9 リッカート得点の分布

リッカート得点	人数	%
0 ~ 199点	33人	14.7%
200 ~ 299点	68人	30.3%
300 ~ 399点	81人	36.2%
400点以上	42人	18.8%

(注) リッカート得点は高い程、職業をもつことに好意的である。全体平均は306.8点である。

次にこの態度を職業の有無、学歴によって比較してみると次のようになった。(表10, 表11)

表10 職業の有無によるリッカート得点の比較

職業の有無	人数	リッカート平均点	検定
就 労 母	133人	330.89	※※
非 就 労 母	91人	271.55	

表11 学歴によるリッカート得点の比較

学 歴	度数	リッカート平均点	検 定	
上 位 群	25名	369.40	} ※※	} ※※
中 位 群	130名	297.89		
下 位 群	69名	301.59		

以上のように、やはり就労母の方が、職業をもつことに對して好意的であることがわかる。また学歴の高い人の方が好意的であった。

この結果をもとに、就労母、非就労母2つのグループに分けて、各項目ごとの平均点を比較し、また各グループごとの因子分析を行なった。

なお、各項目ごとの平均点は低いほうが職業をもつことに對して好意的である。因子分析は主成分分析法にバリマックス回転を施してある。(表12)

各項目ごとに比較しても、やはり就労母の方が17項目中13項目まではっきりと好意的に評定していた。

因子分析の結果、就労母群では第I因子には、9.家庭の雰囲気がかわされる、11.趣味や教養の時間がとれなくなる、13.生活が不規則になる、17.家庭と仕事は両立しないなどに高い負荷量をしめし、われわれはこれを(母親が職業をもつことによって起こる)制約の因子と名づけた。

表12 母親が働くことに対する態度得点とその因子分析

項目	態度得点			就労母因子負荷量			非就労母因子負荷量			
	就労母	非就労母	検 定	I	II	III	I	II	III	IV
1	3.13	3.60	※※	0.510	0.313	0.044	0.469	0.375	0.183	-0.204
2	3.25	3.89	※※	0.074	0.494	-0.446	0.283	0.073	0.772	-0.000
3	2.91	3.45	※※	0.457	0.817	-0.193	0.300	0.240	0.719	0.280
4	3.55	4.10	※※	-0.151	0.809	-0.159	0.021	0.567	0.521	-0.022
5	3.16	3.48	※	0.136	0.809	-0.159	-0.020	0.605	0.396	-0.003
6	2.44	2.72	(※)	0.194	0.243	-0.804	0.209	0.689	0.083	0.211
7	2.38	2.83	※※	0.335	0.325	-0.758	0.114	0.661	0.386	0.291
8	2.67	3.11	※※	0.729	-0.004	-0.290	0.773	0.412	0.180	-0.053
9	2.73	3.21	※※	0.806	0.062	-0.241	0.758	0.354	0.162	-0.107
10	2.52	2.64		0.443	0.503	-0.553	0.273	0.622	0.114	0.413
11	2.52	2.65		0.811	-0.131	-0.150	0.727	0.018	0.264	0.163
12	1.98	2.08		0.143	-0.043	-0.855	0.001	0.227	0.135	0.811
13	2.80	3.12	※	0.828	0.061	-0.159	0.748	0.087	0.045	0.422
14	2.73	3.11	※	0.820	0.017	-0.150	0.851	0.014	0.157	0.108
15	2.70	3.20	※※	0.740	0.288	-0.167	0.522	0.485	0.026	0.313
16	2.52	2.99	※※	0.192	0.430	-0.685	0.334	0.691	-0.056	0.188
17	2.66	2.98	※	0.822	0.270	-0.197	0.527	0.397	-0.013	0.548
PC	—	—	—	31.45	16.28	19.47	24.55	20.13	11.32	10.27

第Ⅱ因子には、4.家事育児を分担してもつ、5.消費生活の向上のためにもつの項目に高い負荷量をしめしたので、文化的・生活志向の因子と命名した。第Ⅲ因子には、6.社会性が身につく、12.社会に役立つべきであるといったものに高い負の負荷量をしめしたので、社会性疑問視の因子と名づけた。一方非就労母群では、第Ⅰ因子には就労母群と同じような項目に高い負荷量を示したので、これも同様に制約の因子とした。第Ⅱ因子でも就労母の第Ⅱ因子と同じ項目に加えて、6.社会性が身につく、7.仕事の理解が深まる、16.社会の一員として職業をもつなどに高い負荷量をしめしたので社会的・文化的・生活志向の因子とした。第Ⅲ因子には2.子どもを施設にあづけても職業をもつ、3.独立心ができるので職業をもつという項目が抽出され、子どもの養育の因子とした。第Ⅳ因子は、12.社会に役立つべきであるという項目のみがあらわれ、社会貢献志向の因子と名づけたこれをまとめておくと次のようになる。(表13)

さて、このような母親が職業をもつことに対する態度と養育態度との関係を検討してみる。(表14)

このように、母親が職業をもつことに好意的な

表13 各グループの因子

群	就 労 母 群	非 就 労 母 群
因子	(母親が職業をもつことによって起る)	
I	制約の因子	
II	文化的・生活志向の因子	社会的・文化的・生活志向の因子
III	社会性疑問視の因子	子どもの養育の因子
IV		社会貢献志向の因子

人の方が、反対している人よりも養育態度得点で好ましい態度を示したものの、有意の差はみられず、あまり影響をおよぼしているとは考えられなかった。

要約 親の養育態度に影響をおよぼす要因について検討した。親の養育態度の測定には「田研・両親態度診断検査」を使用した。被調査者は第一調査においては芦屋市内の幼稚園児39名と保育園児41名、計80名の両親。この調査において次のようなことを見出した。

1. 父親と母親では、父親の方が母親よりも好ましい態度をしめしている。特に母親の拒否的態度が目立った。

2. 母親にとって職業をもつことは、養育態度にとって好ましくない結果となってあらわれてい

表14 母親が職業をもつことに対する態度による比較

態度類型	リッカート得点							
	1 0~199	2 200~299	3 300~399	4 400以上	1と4 の検定	1と3 の検定	1と2 の検定	2と3 の検定
(1) 消 極 拒 否	30.27	29.63	29.21	29.07				
(2) 積 極 拒 否	26.88	26.78	27.02	27.02				
(3) 厳 格	27.21	27.35	26.54	27.45				
(4) 期 待	28.42	29.43	29.00	30.10				
(5) 干 渉	28.52	30.15	29.48	30.10			(※)	
(6) 不 安	22.85	24.25	24.25	24.29				
(7) 溺 愛	26.12	26.76	27.02	27.31				
(8) 盲 従	25.91	24.94	26.20	26.12				(※)
(9) 矛 盾	26.97	27.10	27.02	27.05				
(10) 不 一 致	26.58	28.93	28.25	29.38		(※)		

る。特に消極拒否と両親の不一致が目立った。

3. 親は同性の子どもに対してはきびしく、異性の子どもに対しては甘い傾向がある。

4. 学歴の中程度の父親は子どもに対して高い期待をかけている。学歴の低い父親は矛盾した態度を取りやすい。母親は自分自身の学歴によっては養育態度に差はみられなかったが、夫の学歴によって分類すると、はっきりと差が出てくる。夫の学歴が中程度または低い場合、母親は子どもに対して、高い期待をかけている。また夫の学歴が低い場合、母親の養育態度は他の群に比べて悪い。

第二調査の被調査者は姫路、芦屋、大阪市内の幼稚園児113名、保育園児173名、計286名の母親。この調査において、次のようなことが分かった。

1. 第一子と第二子以下の子どもでは、母親の養育態度ははっきりと違う。最初の子どもに対する母親のとまどいや甘やかしがはっきりと目立ち2つの項目（厳格と期待）を除いて第一子に対する態度得点が低い。

2. 母親の年齢が増すにつれて、安定した好ましい養育態度をしめす傾向がある。

3. 夫の職業で比較してみると、管理的職業従事者の場合はかなり良好な態度があらわれ、専門技術事務職業従事者の場合には過保護および服従の態度が目立ち、現場労働者には積極拒否、期待厳格な傾向がみられた。

4. 母親自身の職業、その労働の形態、忙しきや疲労度、仕事の満足感によって養育態度を比較

したが、1~2の傾向があったものの、一貫していえることはなかった。

5. 生活に満足している母親は養育態度も良好である。

6. 母親が職業をもつことに対する態度において、就労母の方が非就労母よりも、学歴の高い人が中程度または低い人よりも、職業をもつことに好意的であった。しかし、この職業をもつことに対する態度によって養育態度は影響を受けていない。

おわりにこの調査で検討した要因のほかに親が自分の親よりうけた養育態度、親自身のパーソナリティなど重要な要因がまだまだ考えられる。

今後、さらに研究を進め、親の養育態度に影響をおよぼす要因について解明を続けたい。なお、最後になったが、この論文の作成にあたっていろいろ指導下さった田中国夫先生、第二調査にあたった中山貴美子、鈴木加枝子さん、資料の分析にご協力下さった本学計算センター雄山真弓、藤田俊介両氏に心からなる謝意を表す。

参 考 文 献

1. Baldwin A.L. et al, The Appraisal of Parent Behavior. Psychol. Monog., 1944, Vol. 63, No.4.
2. 波多野勤子, 高橋恵子他, 養育行動における母親の情報源Ⅰ, 日本児童研究所モノグラフ, 1968, No. 10.
3. 波多野諄余夫, 井上和子他, 母親の労働観と養育態度, 日本教育心理学会第13回総会発表論文集, 1971, p. 436-439.

4. 井村君子, 品川不二郎他, 親子関係と幼児の性格特性に関する研究(第1報), 日本教育心理学会第11回総会発表論文集, 1969, p. 250—251.
5. 石黒大儀, 社会階層と人間関係, 児童心理, 1956, No. 5.
6. 兒玉省, 日本のしつけと児童の性格形成の研究, 教育心理学年報第8集, 1968, p. 63—68.
7. Mead M., Contrast and Comparison from Primitive Society, 1932.
8. 森脇要, 小林浩夫他, 母親の生活構造のしつけに及ぼす影響について, (1)団地 (2)母子寮 (3)社宅, 日本心理学会, 第27回大会発表論文集, 1963, p. 319—321.
9. 本村汎, 家族診断論, 誠信書房, 1970, p. 78—114.
10. 村尾能成, 親の養育態度と子どもの性格, 心理学への招待, 六月社, 1966, p. 209—260.
11. 中西昇, 小西勝一郎他, 親子関係の心理学的研究, 第1報告, 大阪市大家政学部紀要, 1954, Vol.No.4.
12. 大西誠一郎, 親子関係の心理, 金子書房, 1971.
13. 田淵創, 田中国夫, 親の養育態度に影響を及ぼす要因の検討, 関西心理学会第82回大会発表論文集, 1970, p. 35.
14. 田淵創, 田中国夫, 親の養育態度に影響を及ぼす要因の検討(2), 日本教育心理学会第15回発表論文集, 1973, p.278—279.